

中部教育実践研究会実践報告 (2017) ——主体的・対話的な深い学びをつくる学級づくりと授業づくり——

橋 本 美 彦*

Practice Report about The Chubu Education Practice Study Group (2017) —Classroom Management and Lesson Making to Create Active Learning—

HASHIMOTO Yoshihiko

要 約

平成29年度中部教育実践研究会では、参加している現場教員や教職を目指す学生達は、民主的な学級づくりのために、すべての授業(学習面)や学校生活全般(係活動や当番活動)で班を活用した取り組み(学習集団づくり)を学んでいる。全10回の研究会のうち9回の研究会(第10回は3月24日)の内容を報告する。この研究会を通して参加者は、授業で取り上げる教材解釈と発問づくりについて学ぶ。そして、関わり合い・学び合う授業づくりの手だてを知る。視聴した学級の子どもの姿から4月からどのような学級づくりが行われてきたか、提案教師や助言者からその手だてや指導を聞き、主体的・対話的な深い学びに向かう学級づくりや授業づくりの方策を学んでいる。

キーワード：学習集団づくり、学級づくり、授業づくり、主体的・対話的な深い学び

I はじめに

学級崩壊は、1997(平成9)年前後からマスコミに取り上げられて社会問題化した。1998年にはNHKスペシャル「広がる学級崩壊」で映像として報道された。その番組を視聴した私は、先生の言うことを聞かず授業中に机の上を走り回る子どもの姿に衝撃を受けた。文部科学省は学級崩壊を「生徒が教室内で勝手な行動をして教師の指導に従わず、授業が成立しない学級の状態が一定以上継続し、学級担任による通常的手法では問題解決ができない状態に立ち至っている場合」と定義している。教育現場では、学級崩壊は今もって多くの小・中学校で起こっており、大きな教育問題として立ちふさがっている。現在は「学級崩壊は教師個人の責任である」とは言い難いというのが教育界の定説であるが、マスコミ

や一般の保護者は、未だに学級崩壊などの問題が教師個人の力量論に帰する言説が多い。

長年、教育現場で学級担任として子どもの教育に携わってきた経験や管理職として実際に学級崩壊した学級を立て直そうと取り組んできた経験から、学級崩壊を引き起こす学級担任の問題点を3点あげると、

- ① 学級担任が子ども達の自主性を生かした民主的な学級づくりをしていない。
 - ② 学級担任が子ども同士を関わらせた学級活動や授業実践を行っていない。
 - ③ 学級担任が行う授業に魅力がなく、子ども達を学びの主体にしていない。
- と考えられる。

確かに、学級崩壊が学級担任個人の指導力のなさだけが原因であると言い難いが、実際の学級経営で苦勞するのは、現場の学級担任である。教育学部で学んでいる学生や大学を卒業して教師として働い

* 中部大学現代教育学部現代教育学科

ている若手教員に学級づくりや授業づくりの力量を身につけてほしい。それには、学級を子ども達の「応答し合う」集団として改造し、子ども達が「うなずき合い」、「分からない」を出し合い、問答し合う学習集団づくりの手だてを学ぶ必要がある。中部教育実践研究会は、子ども達が主体的・対話的で深い学びに向かう学級づくりと授業づくりを学ぶことが目的である。

II 研究会の概要

1 研究会開催計画

- (1) 毎月1回（7、9月を除く）、年10回開催
- (2) 開催場所 中部大学名古屋キャンパス、一宮・大徳小学校（第8回のみ）
- (3) 開催時間 13：00～16：00（3時間）

2 研究会開催のねらい

- (1) 目的
 - ・子どもが学習の主体となる授業づくりと学級づくりを学ぶ。
 - ・授業づくりを通して、関わり合い、学び合う民主的な学級づくりの手だてを学ぶ。
- (2) 大学生へのねらい
 - ・学級づくりと授業づくりの具体的な方法を実践事例を通して学ぶ。
 - ・学び続ける教員を育てる。
 - ・卒業後の学びの場を提供する。
 - ・採用試験対応の学びの場を提供する。
- (3) 若手教員（卒業生）へのねらい
 - ・若手教員（卒業生）の学級づくりと授業づくりの力量を高める。
 - ・学び続ける教員を育てる。
 - ・教育現場での悩み解決への助言を行う。
 - ・同窓生の切磋琢磨の場を提供する。
- (4) 教員や学生以外の参加者へのねらい
 - ・学校や担任の教育方針や教育実践の視点を学ぶ。
 - ・学校や教師とのよりよい関係の作り方を学ぶ。
 - ・子育ての悩み解決のための助言を行う。

III 研究会の実際

① 第1回研究会

日：4月22日（土）【参加：24人】

教材：4年社会科「ごみのしよりと利用」

内容：年度当初の学級づくりと授業づくりのポイント

提案者（授業DVD）：平間幸二（一宮・大徳小）

助言者：豊田ひさき（朝日大）、平間幸二（一宮・大徳小）

講師：豊田ひさき（朝日大）

授業分析

授業のねらい：①教室のゴミから学校全体のゴミの量を考え、多くのゴミが出ていることを実感させる。②分別するゴミの出し方、昔はどうしていたのか考えさせる。③このゴミをどう処理するのか。大変な仕事をしてくださる人達への感謝

授業内容：子ども一人ひとりが家のゴミを持ってくる活動→ゴミの多さについて考えさせる。地域や学校の収集所からゴミ収集車はどこに行くのか。何がゴミで何が資源（リサイクル）か。

研究協議から：①新学期の4月上旬学級のスタート…子ども達が自由にものが言える雰囲気作り ②連絡帳に明日の用意を書いていない子の忘れ物への対応、追究の意図（教科書忘れ） ③教師が無言になる意図 ④ゴミと言ったら。自由発言の意図と自由発言の指導方法（まだ発言の声が小さい）「付け足しで」「もう一回言ってください」「○○さんと同じで、賛成で、反対で」など、対話的な発言を意識している ⑤仕切り屋くんはどんな子なのか。今後の指導方法は？ ⑥発言のルールや学習規律ができていないが今後の方向は？（先生の発問や他人の発言を聞こうとしているところを伸ばしていく） ⑦全員発言を目指しているのか（徐々に目指していく） ⑧皆の方を向いて発言している（みんなで話し合っているという指導をしている） ⑨発言の長さが長い子どもがいる ⑩「自由発言ができないと先生が指名するよ」という指導で自由発言を促す ⑪子どもの意見を馬鹿にした児童を注意したことについて

ミニ講義：豊田ひさき（朝日大）

テーマ：アクティブ・ラーニングと授業タクト

参加者の意見：

- ・現場の教師がどのような授業をしているのか、子ども達にどのように教えているのか知れて良かった。
- ・学級の現状が分かりやすかった。
- ・導入のインパクトが大切だと思った。
- ・先生方の話を聞いて自分の将来に生かしていきたい。
- ・子どもを落ちこぼさない。平間先生のような授業ができるようになりたい。
- ・現役の教員や他学年の学生との交流ができて良い経験になった。
- ・実際に授業をするのは大変だと実感した。・教師のひよこですが、これからしっかり成長できるように今日の学びを実践したい。
- ・自分が体験したことのない授業で斬新だった。子ども達がとても楽しそうに授業に参加していた。
- ・中学校とは違い元気いっぱいの子供達ばかりでした。研究会で実践に向けて学びたい。
- ・アクティブ・ラーニングについて分かった。
- ・現場の悩みを話す時間がもっとほしい。

② 第2回研究会

日：5月20日（土）【参加：12人】

教材：4年理科「天気と気温」

内容：授業づくりを学級づくり活かすには？

提案者（授業DVD）：石原光（稲沢・法立小）

助言者：豊田ひさき（朝日大）、平間幸二（一宮・大徳小）

講師：豊田ひさき（朝日大）

授業分析

授業のねらい：一日の気温の変化と天気の変化。晴天・雨天の一日の気温変化の比較。その共通点・相違点と理由

授業内容：折れ線グラフの書き方、読み方の指導。

めあて：晴れの日と雨の日の一日の気温の違いと共通点を考えよう。調べた結果からどのようなことが言えるのか考える。晴天・雨天の気温変化を一つのグラフにしてどちらが晴れか雨か、その理由は？

共通点：一日の気温変化、午後2時が最高気温（晴天26℃、雨天20℃）。相違点：雨天時の気温が晴

天時より全体的に低い（晴天山形、雨天平ら）。

研究協議から：①「○○くんと似ていて」接続詞を用いた発言あり ②「○○くん鉛筆の持ち方がいいね」先生の肯定的評価 ③発言者への注目を促す。（子ども同士の関わりづくり）まだ、発言が短い。④太陽高度は12時が最も高いのに、最高気温はなぜ午後2時か？ 班活動（個人思考してから班での話し合い）を取り入れる。話し合いの方法や発表の仕方を指導中。難しい課題で班での話し合い活用。話し合いの時間を決める（5分間）⑤発表する班が少ない。全班を発表させたい。⑥発言者への注目を評価している。発言者が皆の方を向いて発言するように指示する。⑦「○○くんの意見に似ていて」という発言は対話的な学びに結びついている。⑧発言者（挙手）の少なさの改善や自由発言形式の導入は今後の課題

授業づくりと学級づくりへの助言：接続詞を用いた発言の指導。発言者（皆に向けて）と聞く側（発言者に注目）の関係づくり。肯定的な評価をもっと入れたい。班活動後は全班に発表させる。全員挙手させる発問の明確化

ミニ講義：豊田ひさき（朝日大）

テーマ：主体に「たぐりよせる」学び

参加者の意見：

- ・姿勢を直させたりや目線を合わせたり、注意をしたり、ほめたりするところが多く見え、子ども達をよく見ている。
- ・子ども達の性格を理解することを全体の学びになげられていると感じた。
- ・子どもとの信頼関係づくりが学級・授業づくりに特に大切であると思った。
- ・授業づくりは山場だけでなく、様々な部分でちゃんと構想をしていかなければならないと思った。

③ 第3回研究会

日：6月24日（土）【参加：14人】

教材：4年国語「動いて、考えて、また動く」内容：教材解釈と発問づくりをしよう

提案者（授業DVD）：平間幸二（一宮・大徳小）

助言者：平間幸二（一宮・大徳小）、木村俊哉（稲沢・稲沢西中）

授業分析

授業のねらい：説明文の内容を正しく読み取る。2

段落：①走り方の工夫をし始めたのはいつか。(3つ) ②疑問を感じたのはどのような走り方か。なぜ疑問を感じたのか。3段落：①別の走り方とはどのような走り方か。②別の走り方はいつ試してみたのか。③結果はどうだったか。4段落：ひざを高く上げる走り方は間違いか。

授業内容：発問づくり①高校生のとき言われていたことは？ ②高野さんのいつの時代か？ ③言われてように走るとどうなってしまったか？ ④だからどんな走り方をしたのか？ ⑤それはどこの大会で結果はどうなったか？ ⑥ひざを高く上げて走る走り方は間違いなのか？ ⑦もう一つとは何ともう一つなのか？

研究協議から：①皆の方を向いて本読みをしている。本読みをしている人の方を向いて聞いている。②班での押し出しのアドバイスについて。子ども達が当ててほしいと要求したわけは？③本読みをした子どもへの評価（口を大きく開けて歌うように読めていたこと）④教師の指名と自由発言の使い分け⑤発言の証拠を文章から探して答えること⑥まだ自分のことばで言えていない発言（本文を抜き出した答え）が多い。⑦先生の発問が理解できない子どもが多い。⑧「必ずしも」の使い方について発問する。（良いというわけではなく、どちらでもなく。）⑨接続詞を使って発言できているのは良い。⑩ひざを高く上げて走る理由は、地面を強く踏むことを意識して行うことが大切という理由に行き着けた。⑪まだ自由発言のルールや方法が身についていない。

参加者の意見：

- ・他大学の人と意見交換ができ、発問をいろいろな切り口で考えられ有意義だった。
- ・自分が思いつかなかった考えがたくさん聞けて勉強になった。37年間も教師をされてきて、まだ子どもによって改善することがあるのだと感じた。
- ・自分で発問をつくるのが難しく、先生からの助言があるまで見つけることができなかった。授業風景（子どもの様子）が4月のときと変わっていて驚いた。
- ・自分では発問づくりができなかった。教師は自分

の力で疑問を持ち、発問をつくる力を身につけないといけない。学級の印象がかなり変わっていた。

- ・教師の働きかけによって子どもの学習に対する意欲が大きく変わることを実感した。
- ・挙手制で指名する子どもを誰にするか、教師はよく考えられていることが分かった。刻々の評価（クラス全体で）の必要性を感じた。
- ・先生に向かって発言するのではなく、友達に向かって発言し、それをみんなが聞き全員が授業に参加することが大切であると感じた。

④ 第4回研究会

日：8月26日（土）【参加：13人】

教材：3年道徳「りんごがひとつ」、2年道徳「およげない りすさん」、5年道徳「手品師」

提案者（授業DVD）：原田果奈（蒲郡・西浦小）、的場淳治（春日井・小野小）、平間幸二（一宮・大徳小）

内容：道徳の教材解釈と主発問づくりをしよう

助言者：豊田ひさき（朝日大）、平間幸二（一宮・大徳小）、的場淳治（春日井・小野小）

授業分析

授業のねらい：3年道徳「りんごがひとつ」：寛容、2年道徳「およげない りすさん」：思いやり、5年道徳「手品師」：誠実・正直

授業内容：道徳授業の基本形①導入の問い（価値について）②資料読み③あらすじの確認④発問（起・承・転・結）⑤まとめの問い（振り返り）教師の話

道徳の資料をどう読むか：主人公の気持ちの変化を追っていくこと

主人公は？：3年道徳「りんごがひとつ」：動物たち、2年道徳「およげない りすさん」：あひる、かめ、白鳥、5年道徳「手品師」：手品師

主発問を考える：3年道徳「りんごがひとつ」：どんな顔で「やれやれ」と言ったのか？

2年道徳「およげない りすさん」：かめさんの背中に乗ったりすさんを見ているあひるさん、かめさん、白鳥さんはどんな顔をしていますか？、5年道徳「手品師」：自分が手品師だったらどうするだろうか？

提案者から：道徳の時間で大切にしていること

原田果奈：①子どもの興味・関心のある内容にしている。②導入に力を入れている。③資料は子どもの身近な題材を選ぶ。④道徳の時間で子どもの心を変えたいと思っている。

的場淳治：①道徳の授業をあまりやっていない。（大阪市で務めていたときは道徳をやっていない）②同和教育（人権教育）として行っていた。③仲間づくりや平和教育、外国人教育、男女共生をテーマにしている。④道徳は授業だけでなくすべての教育活動で指導している。⑤今、子どもに足りないと思われる価値を取り上げる。⑥子ども達が「考えること」を大切にしている。

平間幸二：①30年度から教科化されるので実践的な道徳に変えてきている。②評価について考えている。③国民としてのマナーとしての道徳教育④「自分だったらどうするか」など立場を決めて考えさせる。⑤軽い教科になっていることが心配である。⑥子ども一人ひとりが本音で意見の出せる学級、反対意見の出せる学級づくりをしている。

研究協議から：原田果奈：①主発問の意味は何か？コミュニケーションの取り方を学ぶこと②ロールプレいのねらいは？ 主体（自分の問題）になるため③今日の色の意味は？ 4色ある。1主として自分自身に関すること 2主として他人とのかわりに関すること 3主として自然や崇高なものとのかわりに関すること 4主として集団や社会とのかわりに関すること 今日の道徳は2です。

的場淳治：①主発問を「みんなが少しも楽しくないのはどうしてか？」にしたのは？ ②いつもの終末の方法は？ ③りすさんは連れて行けないから陸で遊ぼうという意見は出なかったか？ ④「だめ」と言ったときの3びきの気持ちは？ ⑤3人と4人で言ったときの違いは？ ⑥差別しない、仲間づくり、仲良く、思いやりという意見が出された。

ミニ講義：豊田ひさき（朝日大）

テーマ：主体的な学び

参加者の意見：

- ・道徳を行うに当たり「価値」の意識の強弱で授業がぼやけることを痛感した。
- ・子ども達に考えさせたい「価値」を導き出すため

に、主発問を考えることは授業の核になると感じた。子ども達の日常生活の様子を見届ける必要があると思った。

- ・道徳と国語の授業との違いが分かった。先生方の異なる授業パターンを学べた。
- ・誰を主人公にするか、どのような発問をつくるか勉強になった。一人の意見に賛同や反対があり、子どもにとって新しい考え方が増える良い機会になると感じた。平間先生の発問の少なさに驚いたが、子ども達の様々な意見が出てきて、討論の様になっていた。
- ・価値（徳目）を学ばせると同時に、子ども達にそれぞれの意見を持たせるのは簡単ではないと感じた。
- ・国語と道徳との区別が難しいと感じた。話し合いのための道徳ではなく、道徳のための話し合いにする大変さを知れた。

⑤ 第5回研究会

日：10月7日（土）【参加：15人】

教材：2年国語「スイミー」一場面①②段落

内容：教材解釈から発問づくりをしよう

提案者（授業DVD）：平間幸二（一宮・大徳小）

助言者：平間幸二（一宮・大徳小）、木村俊哉（稲沢・稲沢西中）、的場淳治（春日井・小野小）、藤山裕生（一宮・北方小）

授業分析

授業のねらい：スイミーや仲間達の様子や暮らしている場所、起こったことを捉える。どのくらい広いのか？ どのくらい小さな魚か？ スイミーの特徴は？ ある日何が起こったのか？ なぜ逃げたのはスイミーだけなのか？

研究協議から

授業づくりと教材解釈の仕方：①授業が成立するのは子どもの日常生活につなげること。②教材解釈とは教師が困らないための準備（面白く、身近なことから）③何を学ばせるか（分かりやすく学ばせるために）④低学年では作品に入り込ませ、感じさせるために（多面的に子どもの発言を予想して）⑤作品の内容と主題の理解、作者や作品の歴史や時代背景について調べる。作品に使われている技術・技巧 登場人物の関係性 クライマックス

クス 教えるべきことと発問づくり（多面的に）
授業展開 発問のことば選び 発言予想と対応
今までに学んだことの整理 子どもが理解できなかったときの対応 作品と子どもの日常をつなげる方策 子どもの発達段階の理解 さし絵の利用
⑥子どもに理解させること：場面の理解 イメージづくり 意味の理解 表現の理解 つなげる部分
⑦教材研究の方法：原作に当たる 物語の場所を見に行く 映像を調べる 他の作品に当たる 参考書を読む 他学年の作品を読む ICTの利用
ワークシートづくり 校外・現場へ行く インターネット（ホームページ）で作者や訳者を調べる 他の先生と話す 学年の先生と話す 実物を手に入れる 登場人物の関連図を作る

参加者の意見：

- ・教材研究の方法・発問づくりについて今後に生かすことができる学びができた。
- ・スイミーの一場面で多くの発問があることや自分では気づかない箇所が発問をつくるのが難しかった。
- ・発問づくりについて必要なことが学べた。3人の先生方の発問づくりを聞いて「ゆさぶり」をかける発問が難しいと感じた。細かいところまで聞き出す発問で子ども達に思考をさせているのだと思った。
- ・こういうことが聞きたいが、実際に発問を考えるとどう聞けば良いか分からなかった。一緒の班の先生のアドバイスでどう発問すれば良いかが分かった。「～の気持ちは？」という聞き方ではなく、「このときの～の顔は？」など間接的に聞いたり、「なぜ？」と理由を聞いたりするなどいろいろな方法が使えるようになりたいと思った。何回も考えて良い発問ができるようになりたい。
- ・大学では教えてもらいにくい発問について学べて良かった。「発問は誰のためのするのか？」の答えが「教師自身のため」ということを考えたことがなかったので貴重な体験ができた。
- ・発問の大切さ、難しさ、コツなどが学べて良かった。国語の発問づくり（他教科も）の大変さが分かった。
- ・もっと発問について学ぶ時間がほしかった。

⑥ 第6回研究会

日：11月11日（土）【参加：18人】

教材：4年国語「ごんぎつね3場面」

内容：教材解釈から発問づくりをしよう

提案者（授業DVD）：平間幸二（一宮・大徳小）

助言者：豊田ひさき（朝日大）、平間幸二（一宮・大徳小）、木村俊哉（稲沢・稲沢西中）、

授業のねらい：①いつもいたずらばかりしている子どもでも優しい気持ちを持っている。②何かをなくしてから分かることがある。

研究協議から

教材解釈の仕方：①子どもの実態がスタート 子どもが中心②現地（半田市の新美南吉記念館）に調べに行く③教材を読み込み感じる心（感性）を育てる

読み深めさせたいところ：①ごんが失敗に気づいたところ②「ひとりぼっちの兵十か」と思うごんの心情③ごんの「悪いことをしたな」という気持ち④何回も毎日償いをするごんの気持ち

研究協議から

研究協議での発問づくり：①ごんの償いの気持ちはいつから起こったか②「まず一つ」とは何のことか。どこで思ったのか③「おれと同じ」とは何が同じか④どこで償いをしようと思ったか⑤なぜごんは毎日栗などを持った行ったのか⑥かけもどったのはなぜか⑦「しまった」と思ったときのせりふは？⑧何を思いながら「次の日も、その次の日も」栗を持って行ったのか⑨「おれと同じ兵十」とは何が同じなのか⑩今の子どものいたずらとの違いは？⑪誰に対しての償いか⑫なぜ「そっと」置いていったのか

授業者から：①毎時間「ごん日記」を書いている②「書き込み」（予習）を行わせている③なぜ兵十の家に行ったのか、償いの気持ちはいつからかを考えさせたかった④登場人物や場面の位置関係をはっきりさせた。「あなへかけもどる」とは「登っている」⑤兵十に何かしたい⑥ごんはどこから見ているか。どんなことを考えながら兵十を見ているか。なぜ兵十の家へやってきたのか。お詫びに来たのか。お詫びの気持ちで行ったのではないと思うところは？「向こうへ」行こうとする「向こう」とはどこか。あなへかけもどったのはなぜか。洞

穴は登りか下りか。

参加者の意見：

- ・新美南吉の生い立ちからごんぎつねを解釈することが勉強になった。
- ・教材解釈をし、発問を作るまでグループででき、とても学びが多かった。学生の2人からも教材解釈のヒントがつかめたことが楽しかった。
- ・自分も学習したごんぎつねの解釈を深めることができた。国語の発問づくりは何回考えても難しいと思った。
- ・国語の授業をするには、ここまで読み込んで考える必要があるんだなと思った。DVDで見た子ども達が意欲的に参加している授業を私もできるように学んでいきたいと思った。
- ・とても楽しかった。国語が好きになり、次回も参加したいです。
- ・自由発言で正解に近づいていく方法を学ぶことができた。
- ・何回も読んでようやく発問が考えられた。せっかく半田市に住んでいるのに一回も記念館に行っていないので、家の大きさや今日学んだことを見てきたいと思った。
- ・ごんぎつねの3場面は終わりの場面につながる重要な場面だと分かった。大阪の先生方から様々な意見をもらえ、とても勉強になった。
- ・現場の先生の授業から発問や子ども達との接し方を学ぶことができた。子ども達が学習に向かっていく姿勢を見て、自分も楽しい授業ができるように勉強していききたいと思った。
- ・自分が考える発問は、道徳のようになってしまったことを知り、学ぶことが多かった。授業は学級の空気感や関係性で全く違うものになることが学べました。
- ・現場の先生が入ってくださり、グループで意見交換をすることで他の人の意見が聞けたり、自分の意見に対していろいろな考えや意見が聞けたりしてとてもありがたかった。
- ・新美南吉の一生と「ごんぎつね」の物語がとても似ていて驚いた。南吉の一生を知って教材解釈が変わった。

⑦ 第7回研究会

日：12月23日（土）【参加：18人】

教材：4年国語「ごんぎつね4・5場面」

内容：教材解釈から発問づくりをしよう

提案者（授業DVD）：平間幸二（一宮・大徳小）

助言者：豊田ひさき（朝日大）、平間幸二（一宮・大徳小）

授業のねらい：①気持ちのすれ違い②思いが伝わらないために起こった悲劇③人間関係と心の動き

研究協議から

教材解釈の仕方やキーワード：①コミュニケーション能力を高める方策②情景描写に着目させる③静かか。吉兵衛の家へ行くときと帰るとき④ごんの気持ちに寄り添う（ごん日記）月と影、時間経過⑤心の動きの変化「つけていった」のはなぜか「ずっとまっていた」のはなぜか「聞こうと思って」「つけて」と「ついて」の違いは？

研究協議での発問づくり：①行きと帰りの兵十とごんの距離は？（かげぼうしをふみふみ）②どうしてまっていたのか③「つまらないなあ」どうなってほしかったか④心情の変化…ついて行ったとき 行き帰りのごんと2人の距離は？ 兵十の家へ行ったとき⑤知られたのか知られたくないのか（神様とごんについて）⑥チンチロリンの松虫の声の大きさは？ ⑦月のいい晩とは？

研究協議での授業者への質問：①指名したときは意図があったか②書き込みについて説明してほしい③自由発言形式の良さは？ ④先生は黒板に何をどのように書いているのか⑤挙手による発言と全員が一斉に答えるときの違いは？ ⑥子どもの自由発言をどこで切るのかその基準は？ ⑦発言に証拠を言わせているのは？ ⑧指名と自由発言の振り分けをどう決めているのか

参加者の意見：

- ・授業を進めていく上で発問の重要性を感じた。発問によって授業の方向が決まり、児童の理解度が変わるため、ことばの選び方、発問の順序などを時間をかけて考えなければ行けない。
- ・どのような思いが込められた作品かを考えられた。教師の教材解釈の内容が子どもの意見にどのくらい出てくるのか考えてみたいと思った。
- ・描写を読み取らせることで登場人物の心情をより

はっきりと読み取ることができる。今回はごとと兵十の距離で気持ちの差を比較することができるのと分かった。

- ・教材研究で子ども達が学べる幅が広がるのが実感でき、改めて教材研究の大切さが分かった。学級の子も達との信頼関係の作り方についても聞くことができた。
- ・現職の先生から教材解釈をどのようにしているのかを聞くことができる良い機会だった。グループ内で意見を交流することで気づけなかったことに気づくことができて確かにと思うことが多々あった。
- ・授業前からの着席、話を聞く姿勢、全体での拍手や反応がそろってできるようになるには、どんな働きかけをしてきたのか、どのくらいの期間が必要か、発問に対する反応時間が早いのはなぜか、発言が途切れないのは？ など知りたいことがたくさんあった。
- ・現場に出たらごんぎつねは絶対に扱う教材なので勉強になった。自由発言の良さも改めて知ることができた。
- ・授業を見て児童の発言の多さ、児童と先生のやりとりの自然さに驚いた。数回模擬授業をしたが、発問と次の発問へのつながりがうまくできず良い流れを作れません。平間先生のように自然な流れで発問できるようになるための方法を聞きたいと思いました。
- ・児童の発言から次の発問へつなげている。児童と教師の関係が良い。わからないを素直に言える環境づくりがとても良かった。
- ・年度当初と雰囲気が変わっていた。自由発言による討論や指名した発言が自然に行われていて子ども達の成長を感じられた。
- ・教材解釈では内容を読み込めば良いと思っていたが、昔の情景までしっかり理解し児童に教えられようようにすることが大切だと思いました。

⑧ 第8回研究会

日：1月20日（土）【参加：8人】

教材：4年1/2成人式、4年社会科「愛知県の産業」、4年国語「ウナギのなぞを追って」

内容：一宮・大徳小学校公開参観を通して現場での

授業づくりや学級づくりを学ぶ

授業者：平間幸二（一宮・大徳小）

参加者の意見：

- ・世界地図を表示してウナギの移動の距離や場所を理解させている。
- ・学級の歴史づくりで子どもの頑張りを記録している。
- ・読みで詰まると周りの子が教える。
- ・先生の話や子どもの発言をしっかりと聞いている。
- ・様々な学級で授業を参観し、教師の指導方法の違いが板書、教材、ICT活用などから分かった。同じ学年で発言や集中の度合いが違っていた。研究会では板書が見えないことがあるが、今日は児童の手元や補助教材まで見ることで勉強になった。
- ・いろいろな学級の先生の技術を知ることができた。教師の技術を使う前に学級経営の段階で子どもをその気にさせるように育てることの大切さを学び、学級運営と授業づくりの関連について学べた。とても貴重な体験だった。
- ・社会科では愛知県の白地図を板書し、そこに書き込んでいく学習が行われていた。各市の位置関係を理解させることができていた。国語科では教師から答えを出さず、あくまで児童に発言によって進めていくことが感じられた。
- ・子どもの発言への切り返しや発問の仕方など多くのことが勉強になった。授業中は常に子ども達が問題意識を持ち、主体的に考え、話し合いを通して解決していたところがすごいと思った。今回の参観で教師になりたいという思いがさらに強くなった。
- ・板書の字を丁寧に書くことを心がけていることがよく分かった。誰が見ても分かる字を書くことは教師に求められている力だと思った。道徳の時間では、子どもに分かりやすい話にするか、フラッシュカードや動物の写真などを用意して、子ども達の理解を図っていることが分かった。

⑤ 第9回研究会

日：2月24日（土）【参加：6人】

教材：3年国語「三ねんねたろう」

内容：授業視聴を行い、教材解釈と学級づくりを読

み解こう

授業DVD：祖一順子（宝塚）

助言：豊田ひさき（朝日大）、平間幸二（一宮・大徳小）、
木村俊哉（稲沢・稲沢西中）

授業のねらい：①問題に対して具体的な行動を起こさないと何も変わらない。②三ねんねたろうが行動を起こして村人達を動かしたことを読み取る。

研究協議での発問づくり：①ねたろうは何時頃からみぞを掘っていたのか。②なぜねたろうは川から水を引くために行動を起こしたのだろう。③「ひとり」と「ひとりっきり」の違いは？④子どもが面白ろ半分に手伝ったのはなぜだろう。⑤村の大人達も知らん顔しておれなくなったのはなぜか。それはねたろうが掘り始めてどのくらいたってからか。⑥秋祭りに起きて行動を起こしたのはなぜか。⑦ねたろうの手柄じゃと言われた時のねたろうの気持ちは？

授業者の思いを考える：①母に美味しいご飯を食べさせてあげられなかったからねたろうになった。②3年生にどこを読み取らせるのか。なぜねたろうになったのか。考えていた3年間 どんな思いで寝ていたのか。（子どもに寄り添いながら）③封建時代の百姓の苦しさ 子どもとねたろうの関係④江戸時代の340年間 社会に目を向けさせたい→我が学級に目を向けさせたい⑤枠組みを打ち砕くエネルギーが必要なこと⑥何もしないことの力について

助言者から：①「面白ろ半分」と「知らん顔しておれん」について②「起きてみたら」とは何時頃③子ども→大人 どういう思いの変化か 子どもの思いと大人の思いの違い 早く用水ができた理由④「ところが」明くる朝のこと（逆接の接続詞に着目させる）

祖一学級について：①班で学習 班活動（学習班と生活班が同じ 人間関係づくり）②班での話し合いができる指導がされている。③担任からの肯定的評価活動（ほめる指導）が適切に入っている（今日頑張っているね。いいこと言うじゃないの）④一人ひとりの発言が長い（人に語りかけるような発言 ～でしょう。～はね。）⑤発言の仕方（発言＋理由）⑥先生が子どもの発言を捉えて切り返している。⑦接続詞を使った発言（対話的）がで

きている。友達と関わっての発言をしてる。（付け足すんですが。～さんに似ているんですが。）

⑧発言する方向は教師に出はなく、子どもの達に言っている。発言者に注目して聞いている。先生の立っている位置がポイント⑨まだ発言していない人に発言させようとしている。（全員発言）「今立っている人はいかん」「先生に言わないで」「手の挙げ方で指名する」⑩ノートを見て発言している（書き込みという予習をしている）⑪本文から証拠を見つけて発言している。⑫授業の振り返りができるように模造紙に授業を記録している。⑬子ども同士の拍手がある。⑭本読みに気持ちがこもっている。⑮ペープサートが教科書通りでなくアレンジされている。⑯大きな声で発言している。何でも言える教室の雰囲気がある。⑰教師が引っ張っていく授業⑱見える化することで子どものイメージを共有する。

参加者の意見：

- ・子どもの考えを共有する視覚化の方法が知りたい。
- ・貴重なDVDを見せていただいた。議論もとても勉強になった。

Ⅲ 研究会の成果

(1) 教育現場での実践的な授業づくりや学級づくりを学ぶ。（大学生）

ア 生の授業づくりや学級づくりの実践視聴や話し合いを通して、教育現場の理解や大学での学びの必要性を理解できた。

イ 現職教員と共に学び、教員として必要な教育観、使命感、人間観を学ぶことができた。

ウ 研究協議や意見交換で討論に参加し、採用試験の面接や集団討議の力量をつけることができた。

(2) 授業づくりや学級づくりの力量向上のための支援を行う。（卒業生の教員や講師、若手教員）

ア 本学卒業の教員（講師）に授業づくりや学級づくりの力量を育てることができた。（卒業生の授業提案2回）

イ 卒業生の学びの場を提供することができた。

ウ 学び続ける教員を育てることができた。

エ 学校現場での悩み解決に寄与することができ

た。
オ 本学卒業後の卒業生を支援していく体制を作
ることができた。

- (2) 卒業生の参加者と提案者を増やす工夫をする。
- (3) 学生に学級づくりと授業づくりの方法を伝承す
る。

IV 今後の課題

- (1) 若手教員の学び続ける意欲を高める手だてを工
夫する。

参考・引用文献

- 河上亮一（1999）学校崩壊 草思社
吉本 均（1979）学級で教えるということ 明治図書
吉本 均（1985）授業成立入門 明治図書

受付日 2018年 3 月15日

受理日 2018年 4 月26日